

シリーズ 三郷学

〈三郷学の視点④8〉

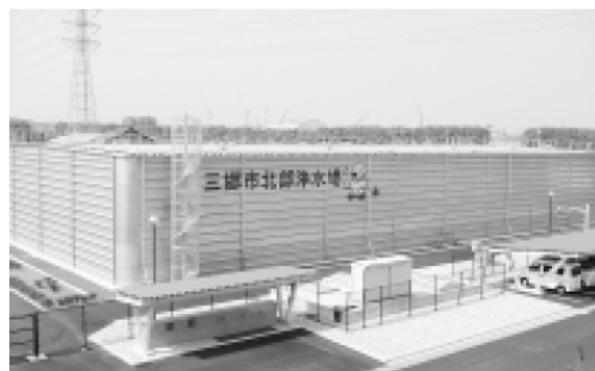
三郷学の実践

7. 資源(水道…水道水が給水されるまで)

三郷市は、江戸川と中川に挟まれ、早場米の産地として発展してきました。地下水位が高く、伏流水が豊富であったため、大正時代の江戸川沿いには、清水の噴出井が数多くありました。当時の住民は、この清水を生活用水として利用してきました。

昭和に入り徐々に人口が増え、経済活動が活発になると、生活排水が噴出井に影響したり、また、火災発生時における消火活動にも支障を来すなど、住民の生活環境が悪化していきました。

これらの問題を解決するため、当時の三郷村では、最初の



ステンレス製配水池(容量:10,000m³)

公営水道として、昭和32年に彦成地区に簡易水道を創設しました。続いて、昭和34年に東和地区、昭和35年には早稲田地区へと拡大し、日常生活できれいな水道水が使えるようになり、住民の生活環境は大幅に改善されました。「簡易水道」とは、水道法上の用語で、給水人口が5,000人以下の小規模な水道事業のことです。現在では、市内全域を給水区域とした上水道事業に発展してきました。

水道は人々の日常生活に直結する、欠くことのできない市民の大切な「宝」、地域資源です。